

学 位 論 文 題 名

テクノロジーの人類学

－「近代」における文化と科学をめぐって－

学位論文内容の要旨

この論文の前提には以下のような「近代の論理」に対する省察がみられる。すなわち、「科学」と「文化」こそ近代世界において、もっとも大きな力で世界を支配し、あらゆるものを説明し、その存在を正当化してきた二大パラダイムであり、あらゆる出来事は、科学、あるいは文化として説明され正当化されなければならない、というのが近代の論理であることを明らかにしている。しかし筆者は、テクノロジーはこれらのすべての領域を横断するはずのものなのであり、現代における大きな課題の一つは、科学と文化という排他的な二つのパラダイムを、テクノロジーという領域でいかに和解させるかにあり、本来の人類学はこれら全ての領域を俯瞰する位置に在るべきであるとの主張を述べている。

このような問題意識のもとに、本論文は4つの章で構成されている。

第1章では、文化人類学とテクノロジーとの関係を、文明と文化、科学と技術についての、さまざまな理論を通して考察している。そこではまず、フランク・ジョージ以降の文化人類学がテクノロジー研究をその研究領域から外してしまった理由を、文明と文化という近代の二つの概念が成立する過程にまでさかのぼって検討している。さらに、近代日本における広範な技術の領域が、どのように「産業技術」と「美術」という科学と文化の領域に再配置および再定義されてきたかについての考察を行っている。つぎに、このような近代の枠組みから排除された「民芸」や、非西欧の「未開美術」という特殊な技術領域の問題についても考察を行い、さらに非西欧社会におけるテクノロジーの受容について、いくつかの事例を通して検討がなされている。これらの考察を踏まえて、次に社会学や科学史・技術史における科学・技術論を通して、技術というものをどのように理解すべきかを理論的に明らかにし、さらに広い技術領域を包摂する人類学の分野では、レヴィ=ストロースが「ブリコラージュ」として定義したような、「文化としてのテクノロジー」と、近代科学による「科学としてのテクノロジー」と呼ぶことのできる、二つの領域が存在することが述べられている。

第2章は、近代化におけるテクノロジーの問題を主題としている。近代化の途上にあるマレーシアにおける、マレーとしてのエスニック・アイデンティティ、世界的な普遍主義的イスラーム化の潮流、そして西欧社会を中心に科学と産業技術によって進められる近代化

の問題を、一つの自動車プロジェクトの事例を通して検討し、現代社会におけるテクノロジーと宗教、あるいは社会の階層化とエスニック問題のあいだのダイナミックな関係を明らかにしている。

第3章では、科学によるテクノロジーの包摂が進んでいるのにも関わらず、科学から文化の領域へと変換することによって蘇る、産業遺産という「文化としてのテクノロジー」の問題を取り上げている。近代社会のテクノロジーは、その価値がいったん失われた後、近代の「風景」の中で近代遺産や産業遺産として蘇る。さらには、十九世紀末のテクノロジーではあっても、「地球環境」というさらに大きな枠組みの中で再定義されることによって、最新のテクノロジーとして再生することができる、電気自動車の事例を検討している。

結章では、これらの議論を踏まえて、二十一世紀の社会におけるテクノロジーと、それが作り出す新しい社会に対して、人類学がどのように関わるができるかが考察されている。二十世紀の社会が前提としていた文化と科学という二つの枠組みでは、ますますテクノロジーを包摂することが困難になる一方で、テクノロジーは人間と機械、自然と文化の境界を破って、サイボーグやサイバースペースという、新たなテクノロジーの領域を生み出していくことが述べられている。そして最後に、このような近代社会が峻別したはずの科学と文化が混在し、テクノロジーが文化と科学の領域を振り子のように揺れ動く二十一世紀の社会における、これからの「テクノロジーの人類学」の可能性についての展望が述べられている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 梶 原 景 昭
副 査 助 教 授 小 田 博 志
副 査 助 教 授 田 島 達 也

学 位 論 文 題 名

テクノロジーの人類学

－「近代」における文化と科学をめぐって－

審査の経過：

平成 13 年 6 月 18 日	博士学位申請論文受理
平成 13 年 6 月 19 日	第 1 回審査委員会開催 申請論文コピー配布および検討する点の確認
平成 13 年 6 月 28 日	第 2 回審査委員会開催 申請論文の成果と特徴、疑問点の検討
平成 13 年 7 月 25 日	第 3 回審査委員会開催 口述試験の質問について検討と整理
平成 13 年 7 月 26 日(午前)	口頭試問実施
平成 13 年 7 月 26 日(午後)	第 4 回審査委員会開催 口述試験の内容を検討し、学位授与の可否を判定
平成 13 年 8 月 20 日	第 5 回審査委員会開催 主査が報告書の原案を作成し、委員会で検討
平成 13 年 9 月 7 日	文学研究科教授会にて審査結果の報告
平成 13 年 9 月 21 日	文学研究科教授会で学位授与を可とする投票結果

本論文は、現代の文化人類学が言説・イデオロギー研究に偏りすぎ（もとより言説研究の重要性は認めるものの）、「実体」や「もの」をすべて「虚構」と「構成物」と短絡してしまう弊をすどく指摘し、人類学再生の戦略を込めて、これまで殆ど本格的な研究のなされなかった、文化とテクノロジーの問題を正面から捉えようとした挑戦的な作品である。

筆者は「文化」および「科学」が近代の支配的なパラダイムとして正統的言説の地位を得ていることに対し、具体的な「もの」や技術の「過程」としてのテクノロジーに注目し、それが排他的な上述の二大パラダイムを融解させる領域であると主張している。これまで

文化人類学におけるテクノロジーの研究は、個別社会を閉ざされた体系として、その中でテクノロジーをめぐる習俗の研究や、あるいはその社会的機能に集中してきた。また限られた例ではあるが先端技術を担う集団（たとえば科学者や技術者）の社会関係を中心とした研究がわずかに存在した。この論文はそうした研究の領野を比較的に拡大するとともに、実際の技術の過程に言及することで深化を計り、はじめて本格的な人類学的テクノロジー研究に途を拓いている。この点は画期的な貢献といつてよい。

第二に、筆者は先端技術の開発担当者として技術の現場に十年以上身を置く体験を有しているが、そうした蓄積を生かし、マレーシアの自動車生産および電気自動車の再発見という、きわめて興味深いテクノロジーの実際について周到な調査を行っている。技術現場（とくに先進技術）をフィールドとした研究はこれまできわめて稀であり、その知見もさることながら、新たなフィールドの開発という点でも意義が大きい。

三番目の特徴として、前述したように「文化」と「科学」の近代における二大パラダイムをテクノロジーによって「和解させる」という主張から、「文化としてのテクノロジー」と「科学としてのテクノロジー」の二つの領域を明らかにし、極性の分析を行うとともに、テクノロジーが振り子のように全体を覆う連続体を形成していることに着目している。こうした点はテクノロジーが言説と「実体」をともに包含するダイナミックな領域であることをよく示しており、テクノロジー論としてきわめて示唆的な見解となっている。

第四に、これまでの人類学的研究、あるいは科学史・技術史など隣接分野の研究に対し広範で周到なレビューと文献の渉猟がなされており、専門研究の狭隘さを超えた論考となっている。

研究テーマの斬新さ、行き届いた方法論、実地調査に基づく知見と比較研究の幅からみて、本論文は現代の文化人類学研究として高い水準を示す成果であり、論文博士に十分に値するものと審査委員会は全員一致して評価している。